

Title	H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるジョージ・ハリスの キリスト教について
Author(s)	森田, 美千代
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.60, 2015.12 : 103-132
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/de tail.php?item_id=5693
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』における

ジョージ・ハリスのキリスト教について

森田 美千代

I はじめに

本稿の目的は、反キリスト者として小説に登場したジョージ・ハリス (George Harris) が、物語の進行につれて、どのようにキリスト者になっていったのかを、テキストに即して、明らかにすることであると同時に、ジョージがキリスト者になっていく過程は論理的に説得的であるかどうか (作者ハリエット・ビーチャー・ストウは、読者が納得できるように、ジョージがキリスト者になっていくプロセスを描いているかどうか) を明らかにすることである。

『アンクル・トムの小屋』の小説は、四五章から成っている。そのうち、ジョージが最初に小説に登場するのは第二章であり、小説から最後に消えるのは第四章である。これをもとに、ジョージは小説にほとんど最初から最後まで登場し続けているのではないかと思われるかもしれないが、そうではない。実際には、登場と登場との間には、かなりの時間の間隔があり、ジョージが小説に登場しているのは、意外と少ない。したがって、本稿の構成も、三つのパートに簡潔に括ることができる。ジョージが、反キリスト者としてカナダに逃亡・出発するところ、ジョージのキリスト教人

生にとって大転換点となるクエーカーの人々との出会い、そして、ジョージが愛国的なキリスト者として、アメリカからリベリアに渡る部分の、三つのパートである。以下において、順に三つのパートをみていきたい。

II ジョージ・ハリスのキリスト者への道のり

1 反キリスト者として、カナダに逃亡出発

ジョージ・ハリスは、第二章ではじめてこの小説に登場する。ジョージは、聡明な混血の男性で、同じく混血のエライザ (Eliza) と結婚していた。結婚はしている（ただし、法的に認められた結婚ではない。奴隷は、法的に結婚することはできなかったからである）ものの、それぞれは、違う主人の所有物であった。ジョージはハリス氏の、エライザはシエルビー氏の、所有物であった。

ジョージは、彼の奴隷主ハリス氏のところから、麻布工場へ賃貸しに出されていた。そこで、ジョージは、「麻の繊維を洗淨する機械」を発明するなど、才能を発揮した。このようなジョージの才能の評判を聞きつけた主人ハリス氏は、ジョージに嫉妬し、彼を自分の農園に連れ戻した。ジョージは、ハリス氏の農園で「一番惨めな苦役」につくことになった（九―一二、二四―二六⁽¹⁾）。

ジョージとエライザは、既述のごとく、違う主人の所有物だったので、別々に住んでいた。ある午後、ジョージが突然エライザを訪ね、「俺は生まれてこなければよかった!」、「死んだほうがましだ!」と、苦しそうに言った。また、「いったい誰があの男「ハリス氏のこと」を俺の主人にしたのだ?（中略）いったいどんな権利をあいづはもっている

というのだ？ あの男が人間だというなら、俺も人間だ。（中略）なんの権利があつてあいつは俺を馬車馬みたいにこき使えるのだ？」と、怒りに満ちて言つた（二二―二三、二八―二九）。

そのようなジョージに対するエライザの応答と、エライザのその応答に対するジョージの反応は、以下のごとくであつた。

あなた、何をなさろうつていうの？ 悪いことだけはしないでくださいね。ひたすら神様を信じ、正しいことをしておりさえすれば、神様はきつとお救いくださいますもの。（一五、山屋・大久保、三七）

ぼくはきみのようにキリスト教徒じゃないからね、エライザ。ぼくの胸は憎しみ (bitterness) でいっぱいなのだ。ぼくには神なんか信じることはできない。なぜ神様は世の中をこんなふうにしておくのだ？（一五、山屋・大久保、三八）

でも、わたしたち、信仰をもたなくてはいけないわ。奥様が言つていらしたけれど、あらゆることがうまくゆかないときにだつて神様は、わたしたちのために最善をつくしてくださっていると信じなければいけない。（二五、山屋・大久保、三八）

以上だけではなかつた。ジョージはさらに、主人のハリスが、ミーナという女を妻にして、一緒に小屋に住め、さもないと深南部へ売り飛ばすつもりだと言つてきたと、エライザに告げた（一五、三二）。

そののち、ジョージは、これからカナダに逃亡すると、エライザに告げ、祈つていくるようになつた。エライ

「サも、「あなたも祈つてね。神様を信じ続けるのよ」と言つた（二六、三三）。こうして、二人は別れた。

ジョージは、まだケンタッキー州にいる。州内の小さな地方ホテルに、ヘンリー・バトラーという偽名を使い、またスペイン人のように変装して、立ち寄つた。そのホテルには、ジョージ逃亡の広告ビラが貼りだされていた。このホテルにはまた、ジョージが以前賃貸しに出されていた工場の工場主ウィルソン氏も立ち寄つていた。このホテルで、二人は再会する。

以下は、二人のあいだで交わされたやりとりである。ウィルソンは、逃亡しているジョージは、「自分の国「アメリカ」の国の法律を犯している」（九四、一三八）のだと言う。それに対して、ジョージは、「私の国ですつて！ 墓場以外のどこに私の国があるというのです」（九四、一三九）と、応答する。それに対して、ウィルソンは、次のように言う。

そんな言い方はよくない。聖書の教えにそむくものだ。（中略）お前の主人は苛酷な主人だ。（中略）しかし、天使がハガルに、女主人のところに戻り、彼女に従うよう命じたという聖書の話をお前も知っているだろう。また、使徒の一人がオネシモを彼の主人のところへ戻したという話もある。（九四―九五、一三九）

私にそのような聖書の引用はしないでください、とジョージは目をぎらぎらさせて言つた。やめてください！ いいですか、私の妻はキリスト教徒です。それに、もしそうなれる所「カナダ」に行けたら、私だつてキリスト教徒になるつもりです。しかし、いまの私のような状況の男に聖書をそんなふうに引用するのは、キリスト教徒になろうという気持ちを断念させるだけです。私は全能の神に訴えるつもりです。――喜

んで私の訴えを神のもとにもっていき、私は自分の自由 (my freedom) を求めるために悪いことをしているかどうか、訊いてみたいと思っています。(九五、一三九)

(前略) しかし、使徒は「おのおの召されたときの身分にとどまっていなさい」⁽⁵⁾と教えておられる。私たちはすべて神の摂理に従わなければいけないのだよ。君にはそれがわからないかね？(九五、山屋・大久保、二〇四)

加えて、もう一度、ウイルソンに、国の法律を犯そうとするなんて恐ろしいと言われ、ジョージは、次のように言う。

またしても、私の国ですか！ あなたには国があります。しかし、奴隷の母から生まれた私や私のような者には、どんな国があるというのです？ 私たちのためにどんな法律があるというのですか？ そんなものは私たちがつくった法律ではありません。—— 私たちが同意したものではありません。—— 私たちはそんな法律には無関係なのです。法律が私たちにすることは、私たちを押しつぶし、抑えつけることだけです。七月四日に繰り返される独立宣言の演説を、私が聞かなかったとでもいうのですか？ あなたがたは私たちすべての者に一年に一度ずつ、政府の正当な権力の抛り所は、支配される者の同意にあると、語ってきかせるじゃありませんか？ そういうことを聞いた者が、ものを考えてはいけないうのですか？ あれとこれを結びつけて、その結果がどうなるかというようなことを見てとってはいけないうのですか？

(九六、一四〇)

ジョージのこの「独立宣言」は、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass, 1818-1895) が、一八五二年七月五日に、「奴隷にとつて七月四日とは何か? (What, to the Slave, is the Fourth of July?)」と題して、ニューヨーク州ロチェスター市で行なつた、独立記念日記念式典演説に影響を与えたといわれている。ダグラスがジョージの独立宣言演説に影響を与えたのではなく、ジョージがダグラスの独立宣言演説に影響を与えたのである。

ほんとうに、私には国などありません、私に父というものがなかったと同様です。しかし私はこれからもとうとうしています。あなたの国に望むのは、私を放つておいて無事に脱出させてくれること、ただそれだけです。カナダへ着けば、カナダの法律が私を認め保護してくれるでしょう。それが私の国であり、そうした国の法律になら、私も従うつもりです。(中略) 私は息の根が止まるまで、自分の自由 (for my liberty) のために闘います。あなた方がおっしゃっている通り、あなた方の建国の父祖はそうやって闘いました。彼らにとつてそうすることが正しかったとすれば、私にだって正しいはずです! (九七、一四二)

神様を信じることだ。お前が無事切り抜けられるよう、心のなかで祈っているよ。(二〇〇、一四六)

ジョージは、応える。「信じられる神様なんているのでしょうか? (中略) 私のいままでの生涯は、神様なんていないと思わせられるような出来事の連続でした。(中略) 神様はあなた方にはいるでしょう。しかしながら、私たちのために、どんな神様がいるのでしょうか?」(二〇〇、一四六)

そんなふうに通つてはいけない! いらつしやるのだ。―神様はいらつしやる。神様の周りにだつて雲や暗

闇はある。しかし正義と審判が神の玉座なのだ。神様はいらっしやるのだ。信じることだ。神様を信用するのだ。そうすれば、神様はきつとお前を助けてくださる。すべてのものは、正されることになるよ。もしこの世でないとしても、あの世で。(二〇〇、一四六)

ジョージは、反キリスト者として、カナダに逃亡出発する。ジョージは、妻エライザだけは終生愛したが、その他の人間、社会、アメリカ国家に対しては、憎しみ (bitterness) がジョージの根底にあった。特に、この段階でのジョージの反キリスト者性を形づくっているのは、アメリカ国家の悪法である。アメリカ国家の法律が、ジョージたち、すなわち黒人たちにしてきたことは、「黒人たちを押しつぶし、抑えつけることであつた」。奴隷たちを「押しつぶし、抑えつける」アメリカの法は、奴隷にとつては法ではなかった。だから、ジョージがアメリカ国家に対して望むのは、「私」[ジョージ]を放つておいて無事に脱出させてくれること、ただそれだけである」と言う。そして、ジョージは、最後の息を引き取るまで、「自分の自由のために (for my liberty)」闘うと、言う。

筆者が、ジョージに違和感を覚えるのは、なぜアメリカ国内に留まって闘わなかったのかということと、ジョージの「自分中心性」である。アメリカ国外に脱出してしまつては、なんとかして白人と共生していく道は、まったく閉ざされてしまう。また、ジョージには、この段階のみならず、この小説を一貫して、他者——他の黒人同胞——が見えていない。「自由のために」ということばの前に、「自分の」ということばが付いている。「他者——他の黒人同胞——のために」、ではない。このような表現は、以後この小説のなかにたびたび出てくる。この「自分中心性」は、ジョージにはまったく意識されていないと思えるが、読者には見えてしまう。

2 クエーカーの人々との出会い

反キリスト者として、ジョージは、ケンタッキーを出発し、オハイオを経て、今カナダに逃亡中である。奴隷制に反対する人々のネットワークである「地下鉄道」の助けにより、今インディアナ⁽⁷⁾に着いたところである。インディアナのクエーカー共同体の家庭で、ジョージは、先にカナダへ逃亡していたエライザとその息子ハリーに再会することができた。

クエーカー (Quaker) とは、どのようなグループなのか。このグループの創始者は、イギリス人のジョージ・フォックス (George Fox, 1642-1691) である。「友会 (The Society of Friends)」とも呼ばれる。クエーカーの特徴は、第一に、『内なる光』つまり聖霊が第一義的なものであり、聖書は神のことばの一形態ではあるが、第二義的なものであるとして、『内なる光』の啓示を確かめ明らかにするための補足的なものであると考えられたことである⁽⁸⁾。第二の特徴は、実践活動である。その活動は、「クエーカー共同体のなかでの経済的助け合いといった小規模なことから、信教の自由、女権拡大、教育の普及、奴隷制廃止、黒人およびアメリカ・インディアンの保護、精神病院の改善、戦時および戦後の救済事業、牢獄改善、戦争の原因排除などへ広げられていった」⁽⁹⁾。

ハリエット・ビーチャー・ストウが、『アンクル・トムの小屋』の小説の大事な場面で、なぜクエーカーのグループを選んだのか。これは、筆者にとつてながいこと、疑問であった。しかし、上述のように、クエーカーの実践活動の大事のひとつとして奴隷制廃止があり、その活動は当時アメリカではよく知られていた（奴隷制廃止を進めている教派

は、クエーカーの活動をポジティブに評価したが、奴隸制を認めている教派は、もちろんクエーカーの活動をネガティブに評価した。どちらの評価にしても、クエーカーの活動が知られていないことはなかったといえるので、ストウ自身が育ったキリスト教的背景とは馴染みがなくても、ストウが小説家としてクエーカーを選んだことには不自然さはないといえよう。そのような理由だけではなく、ストウがクエーカーを小説のなかで用いることができたのは、次のような理由もあった。ストウは、姉キャサリン・ビーチャー (Catharine Beecher, 1800-1878) が創立したハートフォード女子セミナリー (Hartford Female Seminary) で教師をしていたが、一八三二年七月に、クエーカーのアンジェリナ・グリムケ (Angelina Grimke, 1805-1879) がハートフォード女子セミナリーの教師を志願して一週間見学に来ている (アンジェリナは、結果的には、ハートフォード女子セミナリーの教師になることはなかった)。ストウは、その時のアンジェリナとの出会いを通して、クエーカーに出会っている¹¹⁾。そうであれば、ストウが、『アンクル・トム的小屋』の小説において、ジョージ・ハリスのキリスト教人生にとって大転換点となる重要な場面でクエーカーを用いたことは、ひとまず不自然なことではないといつてよいだろう。「ひとまず」という意味は、結論を先取りして言うならば、筆者は、クエーカーの人々との出会いが、ジョージのリベリア行くと、論理的必然性があるとは感じられないからである。つまり、クエーカーの人々に背中を押されて、ジョージは、リベリアに行ったのではまったくないのである。

『アンクル・トム的小屋』の小説においてクエーカーが登場するのは、三つの章においてである。一三章、一七章、そして三七章である。

まず、一三章である。シメオン⁽¹³⁾・ハリデイと妻のレイチェルのクエーカー家庭で、エライザと再会できたジョージは、彼がそれまでの人生で味わったことのない経験をする。

これがまさに家庭 (a home) だった。——家庭——これこそジョージが意味を知りえなかった言葉だった。神への信仰、神の摂理への信頼が、保護と信頼との金色の雲のように、彼の心を包み始めた。暗い、厭人的な、ぐちっぽい、無神論的な疑惑と烈しい絶望は、生きた福音の光 (the light of a living Gospel) のまゝで、溶け去っていった。その福音の光は、いきいきとした顔のなかで息づき、愛と善意に基づく数えきれない無意識の行いによつて、説かれ続けてきたものだった。それらの行いは、弟子の名において与えられる一杯の冷水のように、⁽¹⁴⁾必ず報いられるだろう。(一二二、一七三 強調は原著)

ジョージがそれまでの人生で経験したことのない家庭のよさを、彼はここクエーカーの家庭ではじめて味わう。そのことと神への信仰が、ジョージにおいては結びつく。ジョージは、シメオンとレイチェルのクエーカー家庭を、「生きた福音の光」がいきいきと息づいている家庭であると、心底から納得する。シメオンやレイチェルたちの善き行為は、小さき者に対して、そして小さな愛の行為かもしれないが、神に忘れられることはない。

この一三章は、ジョージの人生にとつて大転換となる場面である。ジョージのその後の人生における思想においても、信仰においても、この場面が基礎となるはずである。しかし、テキストは、こののち、ここを原点にして（ここに忠実に）展開されていったであらうか。そのことが、本稿のこれからにおいて検証されねばならないことのひとつである。なぜならば、このことは、「ジョージがキリスト者になっていく過程は論理的に説得的であるかどうか」にかかわっているからである。

次にクエーカーが小説に登場するのは、一七章である。まだハリデイ家にいるジョージたちに、敵が追ってきていることが告げられた。ジョージは、ピストルを点検し始めた（一六三、一二六）。そのようなジョージに対して、シメオ

ンは、次のように言う。

もしも人間が悪にどうしても抵抗しなければならぬときがあるとすれば、ジョージ、いまこそ、だれはばかりかなくそうすべきだろう。しかし、私たちクエーカーの指導者たちは、もつと卓越した道を説いている。人の怒り (the wrath of man) は神の義を行なわねばなり、と。⁽¹⁶⁾ (中略) 私たちがするように誘惑されないように、神に祈ろう。(一六四、二二八)

ジョージは、次のように言う。

「神は連中」[奴隷制を支持している者たち、具体的にはジョージたちを追ってきている者たち]の味方なのだろうか？ (中略) 「神は連中がやっていることをすべてご存知なのだろうか？ なぜこんなことを起こさせるのだろうか？ 連中は、聖書は自分たちの味方だと言っている。確かに、すべての力は連中の側にある。連中は、金をもっているし、健康で、幸福だ。連中は教会の会員で、天国に行くことを「当然のこととして」期待している。(中略) それなのに、哀れで、正直で、誠実なキリスト教徒たちは、——連中と同じくらい、いや連中よりももっと善良なキリスト教徒たちは、——連中の足もとに、埃に埋もれて横たわっている。連中は、こういう人たちを売り買いし、その人たちの心の血と呻き声と涙で商売をする。——そして神は、連中にそうさせているのだ」。(一六五、二三〇)

そういうジョージに対して、シメオンは、詩編を朗読した。第七三篇第二節—第一一節と第一六節—二八節である。

シメオンは、なぜ詩編第七三篇を選んだのか。ここにクエーカーの典型的な神学なり教理なりが表現されているからだろうか。いや、そうではない。ジョージが抱えているこだわり在即そうと、シメオンが考えたからである。ここに、ジョージに対するシメオンの愛がある。しかし、ジョージに対するシメオンの愛がここにあつたとしても、ジョージは、それを、もちろんのことであるが、クエーカーのものとまったく意識していない。それゆえ、ジョージがクエーカーの家庭で経験したことが、彼がリベリアを選んで行きたいと思う必然性となっていない。

最初に朗読されたのは、詩編第七三編第二節から第一一節である。注解書は、この箇所を、「悪人の繁栄によつて信仰者の信仰は試みを受けている」と、要約している⁽¹⁷⁾。

それなのにわたしは、あやうく足を滑らせ、一步一步を踏み誤りそうになっていた。神に逆らう者の安泰を見て、わたしは驕る者をうらやんだ(envyの形容詞形が使われている)。「第四節はぬけている」。誰にもある労苦すら彼らにはない。誰もがかかる病も彼らには触れない。傲慢は首飾りとなり、不法は衣となつて彼らを包む。目は脂肪の中から見まわし、心には悪だくみが溢れる。彼らは侮り、災いをもたらそうと定め、高く構え、暴力を振るおうと定める。「第九節はぬけている」。このゆえにかれの民は帰り、満杯の水が彼らに絞りだされると、彼らは言う。神いかで知り給うや？ 至高の者に知識ありや？ と。

次に朗読されたのは、第二六節から二八節である。注解書は、この箇所を、「最後の審判に際して、信仰の勝利を確信する」と、要約している⁽¹⁸⁾。

われその意味を知らんと思えども、あまりのつらさに、神の聖所に行きぬ。かくしてわれ驕れる者たちの最

後を悟れり。必ずや汝は彼らを滑かなるところにおき、破滅のなかに投げ入れたもう。〔第一九節はぬけている〕。目覚めしときの夢のごとく、おお主よ、汝が目覚めたるとき、汝は彼らの「偶」像 (image) を侮られん。〔第二節と第二二節はぬけている〕。されど、われは常に汝とともにある。汝はわが右手をしかと取りたもう。汝はその御計らい (thy counsel) によりてわれを導きたるのち、われを栄光のなかに受け入れたまわん。〔第二五節、第二六節および第二七節はぬけている〕。神に近づくことは、われにとりてよきことなり。われ主なる神を信じたれり。

第二四節「汝はその御計らいによりてわれを導きたるのち、われを栄光のなかに受け入れたまわん」は、二つの異なった解釈があるという。一つは、「地上の生涯の後、天上において神に迎えられる」と解釈する。もう一つは、「神の導きを受けて後、神に右の手を保たれ、神と共にあり、悪人からはずかしめにあらずして、神より賜わる栄光にあずかることができる」と解釈する。日本基督教団出版局の『旧約聖書略解』は、後者をとっている。⁽¹⁹⁾ それに対して、『ATD旧約聖書註解』は、前者をとっている。『その後、わたしを受けて栄光にあずからせる』という言葉は、先のことか過ぎたあと、この世に苦難がなくなることだとは解釈できないと思われるからである。希望はむしろ、死後神との交わりが完成されることに向けて述べられているようである。⁽²⁰⁾ 次にあげるシメオンのことばを考慮すると、前者の解釈をとるほうが自然であろう。その、シメオンのことばは、以下の通りである。

もしも、現世 (this world) がすべてだったとしたら、ジョージ、あなたは、それこそ、神様はどこにおられるのだと、尋ねてもいいでしょう。しかし、神がその王国 (the kingdom) に入れるためにお選びになるのは、しばしば現世の生活でほとんど何ももてなかつた人たちです。神を信頼しなさい。現世であな

が起ころうとも、来世では (hereafter) 神がすべてを正しくしてください。(一六六、二二二)

「現世がすべてではない、来世で神がすべてを正しくしてください」というシメオンのことは、既出のウィルソンがジョージに向かつて、「すべてのものは、正されることになる。もしこの世でないとしても、あの世で」と言ったことばと、符合しているといえよう。この思想は、ウィルソンとシメオンの思想であるとともに、作者ストウの思想でもあつたといふことができる。

クエーカーのフィニアス・フレッチャー御する幌馬車で、ジョージとエライザにハリー、そしてジム・セルデンとその年老いた母親は、出発する。トム・ローカーとマークス、保安官二人、それにならず者の一団が、ジョージたちを追う。ジョージたちは、逃走し、そして、とある岩山まで来て、その岩山を頂上まで登った。トムたちが岩山のふもとに着いたとき、トムたちの頭上にある岩の頂に、ジョージが、姿を現わし、片手を高く天に向けて突き上げ、彼の「独立宣言 (declaration of independence)」を行なった (一七〇—一七二、二三五—二三六)。その内容は、以下の通りである。

われわれはあんたたちの法律 (your laws) なんて認めない。あんたたちの国 (your country) も認めない。
われわれはここ、神の空の下に、あんたたちと同じ自由な (free) 「人間として」立っている。そして、われ
われをお造りになった偉大なる神にかけて、われわれは死ぬまでわれわれの自由のために (for our liberty)
闘うつもりだ。(一七〇—一七二、二三六)

ここで、作者ストウが登場し、読者に問いかける。

もしもこれがオーストリアからアメリカへと向かうハンガリーの青年で、ある山の要塞で、自分たちの逃亡を勇敢に守ろうとするものであったなら、それは崇高な英雄的行為であつただろう。しかし、アメリカからカナダへと向かうアフリカ人の血をひく青年で、自分たちの逃亡を勇敢に守ろうとするものであったなら、もちろんわれわれはあまりにも教示され過ぎて、愛国的過ぎるので、そこにいかなる英雄的行為も見ることができないのである。(中略) 絶望したハンガリーの逃亡者たちが、彼らの合法的な政府のあらゆる搜索令状や権限に抗して、アメリカへ渡ろうとするとき、「アメリカの」新聞も政府も喝采と歓迎とで沸き立つ。しかし、絶望したアフリカ系の逃亡者たちが、同じことをするとき、——それは、——どういうことになるのか？ (一七二、二三六―二三七)

ここで、小林憲二は、『アンクル・トムの小屋』についてのエリザベス・アモンズの編注を、次のように訳している。「一八四八年から四九年にかけて、ハンガリーはオーストリアからの独立を試みて失敗した。一八五〇年代には、約一万人のハンガリー人がアメリカ合衆国に渡った」(一七二、五三二)。

『アンクル・トムの小屋』の小説のなかで、クエーカーが登場する最後は、第三七章である。その第三七章の最初のところで、ストウは、次のように言う。「あなたがたの父たちにとって、自由 (freedom) とは一つの国家 (nation) が一つの国家である権利であつた。ジョージ・ハリスにとつて、自由とは一人の人間が獣でなく一人の人間である権利である」(三三二、四五一)。これまでも「自由」ということばは何回も使われていたが、ここで初めて「自由」という

ことばで何が意味されているかがわかる。黒人奴隷にとって、自由とは、動物ではなく、「一人の人間である権利である」。

ジョージとエライザとハリーが、逃亡の目的地であったカナダのアマーストバークという小さな町に着いたとき、彼らは心から神に感謝の祈りをささげた。その祈りは次のごときものであった。

それは死から生への突然の生還のようであつた。

死の屍衣から天上の聖衣へ。

罪の支配から、そして激情の葛藤から、許された罪のきよらなる自由へ。

そこでは死と地獄のすべての束縛が裂かれる、

そして死すべきものが、永遠の衣を着る、

慈悲の御手が黄金の鍵を回し、

そして慈悲の御声が、喜べ、汝の魂は自由を得たり、⁽²²⁾と言ひ給うときに。

(三三五—三三六、四五五 強調は原著)

それまでの人生で経験したことのない家庭のよさを、ジョージはクエーカーの家庭ではじめて味わう。そのことと神への信仰が、ジョージにおいては結びつく。ジョージは、シメオンとレイチェルのクエーカー家庭を、「生きた福音の光」がいきいきと息づいている家庭であると、心底から納得する。クエーカーの人々との出会いは、ジョージの人生にとって大転換となる場面である。ジョージのその後の人生における思想においても、信仰においても、ここを原点にし

て展開されていくはずである。しかし、テキストはそうになっていない。筆者は、クエーカーの人々との出会いが、ジョージのリベリア行くと、論理的に必然性があるとは、感じられない。ジョージは、クエーカーの人々に背中を押されて、リベリアに出発したのではない。テキストでは、クエーカーの人々との出会いと、ジョージのリベリア出発とは、無関係なのである。

3 キリスト者として、自らの国・リベリアへ出発

ジョージとエライザ一家は、今カナダのモントリオールに住んでいる。彼らが自由を獲得してからすでに五年が経過していた（三七一、五〇二）。ジョージは、機械商の店で定職に就き、家族を養うのに十分な収入を得ていた（三七一、五〇二）。また、ジョージは今でも自分を高めようという情熱に駆られ、暇な時間はすべて自己修養に捧げていた（三七一、五〇三）。この最後の部分は、筆者に、あるひつかりを与える。前にも記したが、ジョージにあるのは、「自己の上昇性」であり、「他者」すなわちジョージと同じ黒人同胞に対する哀れみや悲しみの思いが欠落しているように、思われてならない。

ジョージ一家は、フランスに行く僥倖の機会が与えられた。ジョージは、四年間フランスの大学に在学し、十分過ぎるほどの教育を受けた（三七三、五〇五）。しかし、フランスで政変が起⁽²³⁾こり、ジョージたちは、帰国した⁽²⁴⁾。

帰国後、ジョージは、「教育を受けた人間として」、長い手紙を友人の一人に、書いている。ジョージは、小説のなかでは、ほとんど友人がいない。それなのに、友人に手紙を書いているのは、奇異な感じである。しかし、可能性の一つ

としては、本稿でも既出のウィルソンに宛てた手紙かもしれない。あるいは、ストウがフレデリック・ダグラスを想定して書いているのかもしれない。

僕は、自分の将来の進路に関して、いささか迷いを感じている。確かに、君が言ったように、僕はこの国で白人社会に混じる (mingle) ことはできるだろう。僕の肌の色は非常に薄いし、妻の皮膚もほとんどわからないくらいだ。多分僕は黙認されるだろう。しかし、実を言えば、僕はそれを望んでいない。(三七四、

五〇六)

ジョージは、手紙の最初のところで、自分はアメリカには住まないという宣言をしている。その宣言から、この手紙は始まっている。しかし、筆者にとつては、このとき、ジョージはアメリカにいる多くの虐げられている黒人同胞のことを思い出さなかったのだろうか、という疑問が残る。ジョージ個人にとつては潔い決断だったかもしれないが、この決断には「他者」、特に他の黒人同胞、が存在しない決断ではないだろうか。これに対しては、手紙のあとのほうで、「君は、「アメリカで」奴隷になっている僕の同胞を僕が見捨てようとしていると言うのか？僕はそうは思わない。もし僕の生涯で一時間でも一瞬でも、彼らのことを忘れることがあれば、神よ、僕のことを忘れ給え！」と、ジョージが言っていることを、付け加えておく必要はあろう(三七五、五〇七)。

「混血の」僕の共感 (sympathies) は、父の人種 (race) 「白人種」ではなく、母の人種「黒人種」しかない。ジョージの母は、混血の黒人種だった」にある。父にとつて、僕は一匹のりっぱな犬か馬にすぎなかった。しかし、哀れで悲しみに打ちひしがれた母にとつて、僕は「犬や馬でなく」本当に「一人の」彼女の

子どもだった。僕は、母が死ぬまで彼女に会ったことはないのだけれども、母はいつも僕を深く愛してくれ、くれたことを知っている。心 (heart) でそれがわかる。(中略) 僕は非キリスト教的感情 (unchristian sentiments) はもちたくないけれども、アメリカ人として通っていききたいと思わないし、僕をアメリカ人と同一視したいと思わない。(三七四、五〇六)

この手紙では、初めて「キリスト教」ということばが、ここで使われている。ジョージの理解では、「アメリカ人として通っていききたいと思わないこと」と、「自らをアメリカ人と同一視したいと思わないこと」は、彼のどこかでは「非キリスト教的である」ということなのであろう。この論理は、ストウにとっては当然のことであると言つてよいが、ジョージまでそのような論理を認めていることは、これまでのジョージの生き方からすれば唐突で不自然だといえないだろうか。

僕が運命を共にするのは、抑圧され、奴隷化されたアフリカ人である。(中略) 僕が心から願ひ、あこがれていることは、アフリカ人の国籍 (African nationality) をもつことである。(中略) 僕は、それをどこで探したらいいのか？ ハイチ⁽²⁵⁾ではない。というのは、ハイチにおいては黒人たちは、そもそものはじめから何ももつていなかったからである。水の流れは、⁽²⁶⁾その源より高いところへ流れることはできない。ハイチ人の性格を形づくった人種は、疲弊しきつた軟弱な人種だった。(三七四、五〇六)

ジョージが運命を共にするのは、アメリカ人ではなくアフリカ人である、と言っているのは、理解できる。問題は、ハイチである。ハイチについて、筆者は、別稿⁽²⁷⁾で、次のように記したことがある。

レイシストでないことを十全には否定しきれないとの評価もあるストウが、ジョージをハイチではなくリベリアに行かせたかったのは理解できる。しかし、ジョージ自身は、もしアメリカに留まる道を選択しないのであれば、作者ストウに抗つてでも、リベリアではなく、ハイチを選択すべきではなかったか。⁽²⁸⁾

それでは、僕はどこに探したらよいのか？ アフリカ沿岸に、僕は一つの共和国「リベリア」⁽²⁹⁾を見る。(中略)そこなのです。僕が行きたいと願ひ、僕自身を国民であると見出していくことを願うのは。(三七四、五〇六)

続けて、ジョージは次のように言う。

フランスに滞在中、アメリカにいるわが黒人の歴史を研究した。奴隸制廃止論者 (abolitionist) と「リベリア」入植促進論者 (colonizationist) との争いを知った。(中略)僕は、抑圧者たちの手の中で、このリベリアが、われわれ「黒人」に逆らつて、王座決定戦をさせられることによって、あらゆる種類の目的に役立ってきたことを、認める。間違ひなく、この「リベリア入植」計画は、不当な方法で、われわれの解放を遅らせる手段として、利用されてきたかもしれない。しかし、僕にとつての問題は、すべての人間の計画を超え、神なるものが存在しないのか、ということである。神は、抑圧者たちの計画を支配しなかったか？「支配したではないか」。また神は、われわれのために国家を抑圧者によつて創らせ給わなかったか？「神は、抑圧者を使つて、われわれの国家を誕生させてくださったではないか」。(中略)われわれの国家 (nation)

は、その沿岸で、文明とキリスト教 (civilization and Christianity) の波をうねらせ、そこに強力な共和国 (republics) を打ち立てるだろう。その共和国は、熱帯植物のように急速に成長し、永遠に成長していくだろう。(三七四―三七五、五〇七)

この小説において、反キリスト者として登場したジョージが、ここでは、キリスト者であることがわかる。しかも、キリスト教のキリスト教たる核心の一つである「神の逆説」がわかるキリスト者になっていることがわかる。しかし、クエーカー共同体での経験と、「神の逆説」をもわかるキリスト者にここであっていいことが、ジョージにおいてどのようなつながっているのか、はつきりしない。

ジョージは、このあとすぐのところで、アメリカでは自分は、黒人同胞のために何もできないと言う。一個人 (individual) としては何もできないと言う。しかし、リベリアに行き、リベリア国家のある部分を形成し、リベリア国家が国際会議 (the councils of nations) で発言権をもてば、われわれも発言することができると言い、ジョージはその道を選ぶと公言する (三七五、五〇七)。つまり、ジョージは、ここでは、リベリアを政治の面において希望のもてる国としてみていることがわかる。

また、リベリアを、ジョージは、経済の面においても希望のもてる国としてみていることがわかる。「僕はリベリアに、空想のエリジウム『理想郷』へとしてではなく、仕事の場合として、行く」(三七六、五〇九)と言っている。

さらに、ジョージは、リベリアを、文明の面においても希望のもてる国とみなしていることがわかる。ストウは、キリスト教とセットにしているが、「リベリアは、文明の波をうねらせ、熱帯植物のように急速に成長し、永遠に成長していくだろう」(三七五、五〇七)と述べている。そのことはすでに引用した。

ジョージが、リベリアを、政治の面において、また経済の面において、さらに文明の面において、希望のもてる国であるとみなしていることは、ともすればこれまでの研究では見過ごしにされてきた点ではないか。これらの発掘は、ジョージにとつて、益となるものであろう。これによつて、ジョージが、リベリアを、より多面的に観ていることがわかるからである。

とはいえ、何と言つても、ジョージは、リベリアを、キリスト教の面において希望のもてる国とみなしている。手紙の最後で、ジョージはつぎのように述べている。

キリスト教徒の愛国者 (a Christian patriot) として、キリスト教の教師 (a teacher of Christianity) として、僕は僕の国 (my country) へ行く。神によつて選ばれた僕のアフリカ、輝かしい僕のアフリカへ。そして、アフリカに、僕の心のなかで、ときどき予言書のなかのあのすばらしい言葉をあてはめてみる。「かつてあなたは捨てられ、憎まれ、通り過ぎる者もなかったが、今、わたしはあなたをとしへの誇り、代々の楽しみとする」⁽³¹⁾。(三七六、五〇九)

この段階でのジョージは、「神の逆説」がわかるキリスト者になっていた。しかし、それは、あまりに唐突で、不自然であると言わざるをえない。また、ジョージは、キリスト教の教師であるとともに、愛国者のキリスト教徒である者として、リベリアへ行つた。

なぜリベリアなのか。既に述べたことを、再びここで繰り返すと、レイシストでないことを十全には否定しきれないとの評価があるストウが、ジョージをハイチではなくリベリアに行かせたかったのは理解できる。しかし、ジョージは、アメリカに留まつて、同じ黒人同胞のために闘うべきではなかったか。もしその道を選ばないとすれば、作者スト

ウに抗つてでも、リベリアではなくハイチを選ぶべきではなかったか。

ジョージは、何と言つても、リベリアを、キリスト教の面において希望のもてる国とみなしている。しかし、ジョージは、リベリアを、政治や経済や文明の面においても希望のもてる国とみなしていることが、テキストによつてわかる。後半の部分は、これまでの研究者たちによつて見過ごされてきた点ではないだろうか。

リベリアに関して、ストウの考えを、二つ記しておきたい。一つめは、『アンクル・トムの小屋』の第四章において、ストウが次のように述べていることである。

われわれは彼ら「黒人」にこの国にいてもいたくない、彼らをアフリカに行かせよと、あなた方は言うのか？ 神の摂理によつて、アフリカに避難所が設けられたことは、確かに、大きな注目すべき事実である。しかし、だからといつて、（中略）奴隷制の鎖から逃れたばかりの、無知で経験もなく、なかば野蛮ともいつていい人種で、リベリアをいっばいにしてしまうことは、新しい企ての初期段階に伴う苦闘や葛藤の期間を、何年ものあいだ、引き延ばすだけだろう。これらの貧しき被害者たちを、キリストの精神において、北部の教会に受け入れさせよ。キリスト教的共和主義の社会や学校（Christian republican society and schools）が教育するのが好結果となるように、「北部の教会に」彼らを受け入れさせよ。そうすれば、彼らは、道徳的にも知的にもある程度成熟する。それから、彼らがアフリカの沿岸へ渡るのを、「北部の教会に」助けさせよ。「そうすれば、」そこで、彼らは、アメリカで学んだものを、実践に移せるかもしれない。

（三八五―三八六、五二二）

ここでストウが言っていることは、黒人たちをアメリカからまっすぐにリベリアに行かせないで、ひとまず北部の社会や教会や学校に彼らを受け入れて、彼らを訓練し、その後彼らをリベリアに送れば、アメリカで学んだものを彼らは活かせるということである。いくつかのステップを踏んで、黒人たちをリベリアに送ろうとする提案である。⁽³²⁾ この提案は、一八五二年のことである。

しかし、この提案は、翌年の一八五三年に、ストウ自らによって、事実上無きものとされていることがわかる。小林憲二は、次のごとく言っている。

トーマス・ゴセットの伝えるところによれば、一八五三年五月に開催された「全世界奴隸制反対協会」の会合で、「アメリカ黒人のアフリカへの植民」に関するストウ夫人のメモが読み上げられ、「もしふたたび『アングル・トムの小屋』を書くようなことがあれば、ジョージ・ハリスをリベリアに送るようなことはしないだろう」との意志を伝えたということである。⁽³³⁾

III おわりに

本稿の目的は、反キリスト者として小説に登場したジョージ・ハリスが、物語の進行につれて、どのようにキリスト者になっていったのかを、テキストに即して、明らかにすることであると同時に、ジョージがキリスト者になっていく過程は論理的に説得的であるかどうか（作者ハリエット・ビーチャー・ストウは、読者が納得できるように、ジョージがキリスト者になっていくプロセスを描いているかどうか）を明らかにすることであった。

本稿Ⅱ―1において、ジョージは、反キリスト者として、カナダに逃亡出発する。妻エライザだけは終生、ジョージは愛したが、その他の人間、社会、アメリカ国家に対しては、憎しみ (bitterness) がジョージの根底にあった。特に、この段階でのジョージの反キリスト者性を形づくっているのは、アメリカ国家の悪法である。アメリカ国家の法律が、ジョージたち、すなわち黒人たちにしてきたことは、「黒人たちを押しつぶし、抑えつけることであつた」。奴隷たちを「押しつぶし、抑えつける」アメリカの法は、奴隷にとっては法ではなかった。だから、ジョージがアメリカ国家に対して望むのは、「私」[ジョージ]を放つておいて無事に脱出させてくれること、ただそれだけである」と言う。そして、ジョージは、最後の息を引き取るまで、「自分の自由のために (for my liberty)」闘うと、言う。

筆者が、ジョージに違和感を覚えるのは、なぜアメリカ国内に留まって闘わなかったのかということと、ジョージの「自分中心性」である。アメリカ国外に脱出してしまつては、なんとかして白人と共生していく道は、まったく閉ざされてしまう。また、ジョージには、この段階のみならず、小説を一貫して、他者——他の黒人同胞——が見えていない。「自由のために」ということばの前に、「自分の」ということばが付いている。「他者——他の黒人同胞——のために」、ではない。このような表現は、この小説のなかにたびたび出てきた。

Ⅱ―2において、ジョージはクエーカーの人々と出会う。それまでの人生で経験したことのない家庭のよさを、ジョージはクエーカーの家庭ではじめて味わう。そのことと神への信仰が、ジョージにおいては結びつく。ジョージは、シメオンとレイチェルのクエーカー家庭を、「生きた福音の光」がいっきと息づいている家庭であると、心底から納得する。クエーカーの人々との出会いには、ジョージの人生にとって大転換となる場面である。ジョージのその後の人生における思想においても、信仰においても、ここを原点にして展開されていくはずである。しかし、テキストはそのようになつていない。筆者は、クエーカーの人々との出会いが、ジョージのリベリア行くと、論理的に必然性があるとは、感じられない。ジョージは、クエーカーの人々に背中を押されて、リベリアに出発したのではない。テキストで

は、クエーカーの人々との出会いと、ジョージのリベリア出発とは、無関係なのである。

II-3において、ジョージは、キリスト者として、自らの国・リベリアへ出発した。この段階でのジョージは、「神の逆説」がわかるキリスト者になっていた。しかし、それは、あまりに唐突で、不自然であると言わざるをえない。また、ジョージは、キリスト教の教師であるとともに、愛国者のキリスト教徒である者として、リベリアに行った。

なぜリベリアなのか。レイシストでないことを十全には否定しきれないとの評価があるストウが、ジョージをハイチではなくリベリアに行かせたかったのは理解できる。しかし、ジョージは、アメリカに留まって、同じ黒人同胞のために闘うべきではなかったか。もしその道を選ばないとすれば、作者ストウに抗ってでも、リベリアではなくハイチを選ぶべきではなかったか。

何と言っても、ジョージは、リベリアを、キリスト教の面において希望のもてる国とみなしている。しかし、ジョージは、リベリアを、政治や経済や文明の面においても希望のもてる国とみなしていることが、テキストによつてわかる。後半の部分は、これまでの研究で見過ごされてきたのではないだろうか。

今回、ジョージ・ハリスに取り組んでみて思ったことは、以下のようなことである。ジョージという人間を根本的なところで形づくっているのは、黒人奴隷であることが原因であろうが、「憎しみ」である。

黒人奴隷としての、この「憎しみ」と、国家やキリスト教との関係において、ジョージには、一貫性がないということである。国家との関係でいえば、はじめは、反国家の立場でカナダに脱出し、のちに、国民として国家形成を担う者になりたいと思い、リベリアに渡った。キリスト教との関係でいえば、クエーカーの人々との出会いは、ジョージにとつて決定的にプラスに働いた。それまでの黒人奴隷としての「憎しみ」から解放される経験をした。しかし、クエーカー共同体でのその経験とジョージのリベリア行きがつかない。ジョージ・ハリスには、一貫性のなさがつき

まとなっている。作者ストウがジョージをどのように造型したからなのだが、ストウもジョージにはどこかで「困っていた」に違いない。

注

(1) 英語テキストは、Elizabeth Annons 編の *Uncle Tom's Cabin, or Life Among The Lowly* を用いる。日本語訳は、主として、一九九八年に明石書店から出版された小林憲二監訳を用いる。しかし、場合によって、拙訳を用いている部分もあるし、一九六七年に旺文社文庫として出版された大橋吉之輔訳、一九六五／六六年に角川文庫として出版された山屋三郎・大久保博訳、一九五二年に新潮文庫として出版された吉田健一訳を用いている部分もある。引用箇所は、本文中に、英語の頁数と日本語の頁数の順序で示す。訳者名を特に明記していない場合は、小林監訳である。

(2) ストウは、カナダを、聖書でいうカナンあるいは天国を反映している場所として、とらえている。David S. Reynolds, *Mightier than the Sword: Uncle Tom's Cabin and the Battle for America* (New York: W.W.Norton & Company, 2011), 37.

(3) 創世記第一六章第九節。一九五七年に日本基督教団出版局より出版された『旧約聖書略解』三四頁においては、次のように記されている。「ハガルにも反省すべき点があった。彼女は傲慢であった。神による敬虔な反省は彼女に忍耐を教え、悔いて御言葉の如く女主人の家に帰ったものと思われる」。

(4) ファイレモンへの手紙第一節―第一六節。上注の六四三頁においては、次のように記されている。「パウロがローマの獄中にあった時、いかなる事情かは明らかでないが、逃亡奴隷オネシモを知り、これを信仰に導き、わが子のように愛するに至った。しかし、逃亡は不法なことであるゆえ、パウロはオネシモをさとして主人ファイレモンのもとに帰すこととなった。(中略) とらわれの身のパウロは、ファイレモンおよびほかの二人と彼らの教会に対し、オネシモをゆるしてふたたび奴隷とし

て手もとに置いてくれるように、心をこめて手紙をしたためた」。

- (5) コリント人への第一の手紙第七章第二〇節。上注の四六八頁によれば、「信者おのおのに、主がわかち与えた、この世の身分や境遇などにとどまつているべきである」。

- (6) 詩編第九七編第二節。一九八七年に A T D・N T D 聖書註解刊行会より出版された『A T D 旧約聖書註解 14』五一頁においては、次のように記されている。「神は隠れた方として現れ給う。(中略) また、神の支配の基礎は正義と審きである」。

- (7) 曽根暁彦によれば、「クエーカーの人々は、一八世紀の終わりごろには、ペンシルヴァニア、メリーランド、ヴァージニア、カロライナ、ジョージアなどから、北西部、すなわちオハイオ川とミシシッピ川との間の土地に移住し、インディアナにも流れた」、ということである。クエーカーが北西部を選んで移動したのは、条例によって、この地方は奴隸制が禁じられていたからであった。曽根暁彦『アメリカ教会史』日本基督教団出版局、一九七四年、一三六頁。

- (8) 宮城妙子『Uncle Tom's Cabin』におけるクエーカー教徒の戦略的用いられ方』『英文学思潮』七八巻、二〇〇五年、二〇三頁。
- (9) 同上、二〇五頁。

- (10) ストウのキリスト教的背景は、長老派、会衆派、監督派などである。父ライマンの死後は、母ロクサーナの教派であった監督派に、ストウは移っている。

- (11) 三上節子『悲哀に根ざした愛の教育観——新渡戸稲造とハリエット・ビーチャー・ストウの比較研究——』麗澤大学出版会、二〇〇八年、一七二—一七四頁。

- (12) 興味深いことに、ストウが宗教的に影響を受けているジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703–1758) は「クエーカーを」、「反クリスチャンの異端者 (antichristian heretics)」と呼んでゐる。Helen Peter Westra, “Confronting Antichrist: The Influence of Jonathan Edwards’s Millennial Vision,” in *The Stowe Debate: Rhetorical Strategies in Uncle Tom’s Cabin*, ed. Mason I. Lowance, Jr., Ellen E. Westbrook, and R.C. De Prosio (Amherst: University of Massachusetts Press, 1994), 150.

- (13) 「イエスの誕生当時エルサレムに住み、メシアの降誕を待望していた信仰厚い老人。イエスを抱いて礼賛したその讃歌は、『シメオンの讃歌』として有名である(ルカによる福音書第二章第二五節—第三二節)」。新教出版社編『聖書辞典』一九六八年、二二二頁。シメオンの名前を、ストウはここからとってきたと想像できる。

- (14) マタイによる福音書第一〇章第四二節。「はつきり言っておく。わたしの弟子だという理由で、この小さな者の一人に、冷

たい水一杯でも飲ませてくれる人は、必ずその報いを受ける」。日本基督教団出版局から一九九一年に出版された『新共同訳新約聖書注解Ⅰ』の八三頁では、「僅か水一杯の授受「小さな愛の行為」でも神に忘れられることはない」と記されている。

(15) 原文は、the leaders of our peopleとなっている。大橋訳では、「われわれの指導者たち」、山屋・大久保訳では、「われわれ人類の指導者たち」となっている。

(16) ヤコブの手紙第一章二〇節。

(17) 『旧約聖書略解』日本基督教団出版局、一九五七年、五六一頁。

(18) 同書、五六一頁。

(19) 同書、五六一頁。

(20) 『ATD旧約聖書註解13』ATD・NTD聖書註解刊行会、一九八五年、一二二―一二三頁。

(21) ここでは、「わたしの自由のために (for my liberty)」ではなく、「われわれの自由のために (for our liberty)」となっている。ジョージのために言っておかねばならない。

(22) 残念ながら、この出典は不明である。

(23) 一九六七年に旺文社文庫(下)として出版された大橋吉之輔訳の三九九頁の訳注では、次のように記されている。『アンクル・トムの小屋』の年代は一八五〇年から一八五五年ごろまで、これにジョージ・ハリスの滞仏四年間を加えると、一八五九年までになる。この当時政変は起こっていない。ナポレオン三世は一八七一年まで健在である。一九六六年に角川文庫(下)として出版された山屋三郎・大久保博訳の四二二頁の訳注では、次のように記されている。「作者「ストウ」は一八五一年一月二日のクレーターを念頭においていたのであろう」。

(24) カナダを指しているのか、アメリカを指しているのか、テキストそのものからははっきりしない。しかし、本稿で使っている英語テキストの編集者Elizabeth Ammonsも、Keith Carbineも、「おそらくカナダであろう」と言っている。アモンズに関しては、英語テキストの三四四頁(注1)と日本語訳(小林憲二監訳)の五三七頁(第四章注1)を参照していた。Keith Carbine, "An Introduction and Notes," in *Uncle Tom's Cabin* (Hertfordshire: Wordsworth Editions Limited, 1995), 436.

- (25) サント・ドミンゴと言われていた。サント・ドミンゴは、フランスの植民地であったが、黒人たちによる奴隷解放と独立のための運動を通して、一八〇四年世界初の黒人共和国・ハイチとして独立した。浜忠雄『ハイチの栄光と苦難——世界初の黒人共和国の行方——』刀水書房、二〇〇七年、一四頁、二二頁。
- (26) 山屋・大久保訳(下)の四二二頁の訳注では、次のように記されている。「アフリカからハイチに送られる奴隷の流れの意味にもかけている」。
- (27) 「H・B・ストウ『アンクル・トムの小屋』におけるオーガステイン・セント・クレアの奴隷制について」『聖学院大学総合研究所 NEWSLETTER』Vol.25-1, 二〇一五年。
- (28) 同上、一六頁。
- (29) 本稿で用いている英語テキストの編集者アモンズによれば、リベリアは、一八二一年に、アメリカ植民協会によってつくられ、ここは自由黒人の拠点となった。南北戦争終結までに、一万五千人の自由黒人移住者が、リベリアに定住した。英語テキストの三七四頁(注2)と日本語訳(小林憲二監訳)の五三七頁(第四章注2)を参照していただきたい。
- (30) 聖書ではエルサレムのことであるが、ここではアフリカのことである。
- (31) イザヤ書第六〇章第一五節。
- (32) 小林憲二によれば、弟ヘンリー・ウオード・ビーチャーもストウと同じ考えをもっていたということである。小林憲二『アンクル・トムの小屋』の再評価と位置付け』『新訳アンクル・トムの小屋』明石書店、一九九八年、五六〇頁。
- (33) 同上、五六六頁。